



「自分づくり」の歩みとこれからの学校づくり：生活を楽しむ子ども・青年・教師たちに学んで(参考資料)

國本，真吾

(Citation)

日本特殊教育学会第57回大会 自主シンポジウム10-4 「自分づくりの段階表」の意義と可能性：教育実践と発達理論をつなぐ試みとして

(Issue Date)

2019-09-23

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006351>



「自分づくり」の歩みとこれからの学校づくり

～ 生活を楽しむ子ども・青年・教師たちに学んで ～

鳥取短期大学幼児教育保育学科
國本 真吾

○ 学校創立40周年を迎えて～半世紀以上の知的障害教育～

鳥取大学附属特別支援学校(以下、「本校」)は、2017年度で創立40周年を迎えた。1978年4月、附属小学校・中学校の特殊学級を母体に本校が設置されてからがその始まりに思われるかもしれないが、学校の前史に触れておきたい。

1962年、鳥取大学学芸学部附属小学校に特殊学級が置かれたことが、本校の起源と言える。当時の附属小学校は鳥取市尚徳町(現在の鳥取県立図書館・とりぎん文化会館の位置)にあったが、特殊学級は学芸学部(鳥取市立川町5丁目)の中に置かれた(学芸学部は1966年に湖山へ移転して教育学部へと名称変更)。1964年には附属中学校に特殊学級が置かれ、1965年には附小特殊学級も尚徳町の本校へ移転した。この、附属小・中学校特殊学級16年間の流れを引き継ぎ、本校は今日に至っている。その意味からも、鳥取大学は半世紀以上にわたる附属校での知的障害教育の蓄積と実績がある。

本校が設置された1978年度は、京都盲啞院から始まる「特殊教育」の100年という節目でもあった。そして、翌1979年度からの養護学校義務制実施を控えた時期でもあった。本校は、開校の翌年には尚徳町の仮校舎から現在地の湖山町へと移転し、新校舎とともに高等部が学年進行で設置された。

学校創設時の元教員の言葉を借りれば、「附属養護学校」の原型は1969年と捉えられている。本校の開設は、前述の通り附属小・中学校特殊学級が母体になった。附中特殊学級が3クラス編制になるのは、学級設置から学年進行で完成を迎える1966年である。附小特殊学級は、開級の翌年1963年に2学級に増級されたが、3クラス編制になったのが1969年であった。附小・附中の特殊学級がともに3クラスずつになったこの年が、本校開設時のクラス編制の基礎となったということである。

このように見れば、本校は学校創立「40年」に留まらず、前史の「+α」(特殊学級設置から16年、もしくは6学級体制での9年)の時間の中で、今日につながる学校づくりの営みが重ねられてきたと言えよう。

○ 特殊学級時代が今日の学校の基礎～先人に学ぶ～

本校の教育の起源を考えた場合、附小・附中の特殊学級時代と見るのが適当であろう。そこで、附小特殊学級にさかのぼってみたい。

附小特殊学級が設置された時の担任だった山里一夫は、学級開設時の様子を次のように記している。

表1 本校の沿革

昭和37年	1962年	鳥取大学学芸学部附属小学校に特殊学級1学級を設置する。教室を学芸学部(立川町5丁目)内に置く(翌年1学級増)。
昭和39年	1964年	鳥取大学学芸学部附属中学校(尚徳町)に特殊学級1学級を設置する(学年進行)。
昭和40年	1965年	附属小学校特殊学級を附属小学校本校舎(尚徳町)内に移転する。
昭和41年	1966年	中学校特殊学級3学級編成になる。
昭和44年	1969年	小学校特殊学級3学級編成となる。
昭和53年	1978年	鳥取大学教育学部附属小・中学校特殊学級を改組し、「鳥取大学教育学部附属養護学校」(小学部3学級、中学部3学級)を設置する。教室を附属小・中学校(尚徳町)内に置く。
昭和54年	1979年	新校舎(湖山町西2丁目149)に移転。高等部1学年を設置する(学年進行)。段階別教育内容表を制定する。
昭和55年	1980年	校歌制定
昭和56年	1981年	高等部3学年各1学級編成となる。
平成11年	1999年	鳥取大学教育学部改組により、学校名が「鳥取大学教育地域科学部附属養護学校」となる。
平成16年	2004年	鳥取大学が国立大学法人となり、学校名が「鳥取大学附属養護学校」となる。
平成18年	2006年	国公立の養護学校として、全国初の専攻科を設置する。
平成19年	2007年	学校教育法の一部改正の施行に合わせ、学校名が「鳥取大学附属特別支援学校」となる。

最初に出会った子どもたちと2つの約束をした。1つは「勉強をしない」ということ。1つは、「みんなで遊ぼう」ということだった。子どもたちの表情がいつぱんに変わった。「やったあ」、「勉強せんだって」と。家に帰ったK子などは、「お母さん、今度の先生勉強せんだって」と目を輝かしたという。勉強の嫌いな子どもたちとよく遊んだ。1ヶ月もすると、「先生、勉強しましょう」と子どもたちが言いだした。

(「創立二十周年記念誌」、一部児童名をイニシャル化)

本校元教員の藤原章によると、学級設置時は「児童の実態から教科指導では子どもから拒絶反応が起こり授業不成立の状態が生じた」とある。上記の山里による開設時の子どものエピソードの背景には、そのような事情も踏まえてのことだったのだろう。そして、藤原は「子どもが意欲的に学ぶには、子ども自身が学習を楽しんでいると感じなければ、子どもに何も残らない。子どもに残るものがなければ、生活に還元されない。『はじめに生活ありき』ということから、附小特殊学級は「教科中心への疑問から、子どもが楽しめる『生活単元学習』へ」と教育課程を編成していったとしている(藤原章 [2014] 『鳥取県特別支援教育のあゆみ』鳥取出版企画室)。

このような附小特殊学級時代の姿勢は、尚徳町の本校舎へ移転した後に著された附小の研究本からも読み取れる。鳥取大学教育学部附属小学校の著者名で、明治図書から1968年に出版された『創造の過程と学習展開』の第10章は「精神薄弱教育と創造性」として、特殊学級の実践を収めている。附小全体で「創造性」が鍵になった研究ではあるが、「精神薄弱児の学習は、まず、生活の経験や知識の定着をはかることであり、その内容を豊かにし、社会生活の中でうまく活用していく過程が、精神薄弱児の創造過程である」と記されている。そして、「精薄児学級における指導の素材は、日常生活の具体的事実の中から選ばれその内容を、子どもたちが視聴覚、感覚運動を通じて容易にとらえられるように単純化しなければならない」と、「生活」を中心とした教育の必要性が説かれている。造形活動の指導事例の紹介部分では、「精神薄弱児に対する造形活動の指導の本質は、一言にしていえば指導しない指導といえる。この指導は造形的活動をつねに整えておく、教師が準備やあと始末をめんどうがらず子どもと一しょにする、の二つである。子どもたちの制作の過程では、子どもたちの活動を励まし、話し合い、のびのびとその活動が持続するよう心がけることがたいせつである」と述べている。この記述は「造形活動」に関してではあるが、先の開級時の様子に通ずるところもあり、附小特殊学級の教育の姿勢を端的に示している部分であろう。藤原が言うように、本校の生活単元学習は「附小時代の『生活』中心の教育課程を継承」という所以は、このようなところからも導き出される。

○「自分づくり」を基盤とした「生活を楽しむ子」の育成～学校の自分づくりはいつか？～

本校の学校教育目標は、「楽しい学校生活の中で、『自分づくり』を基盤として、一人一人の力を精一杯伸ばし、働くことに喜びをもち、社会の一員として豊かに生きる人間を育成する。(一人一人の達成感・充実感、自信、面白さ、好奇心、意欲のたかまりなど)」とされ、「豊かな心をもち、生活を楽しむ子」と表現されている(「平成29年度学校要覧」)。後段の「豊かな心をもち、生活を楽しむ子」という言葉は、本校の教育がめざす人間像(児童生徒像)とも言え、前段の教育目標の意味を象徴的な表現に置き換えている。しかし、この学校教育目標は学校創設時のものとは異なる。

本校創設時は、「社会的自立」が目標となっていた。この目標は、「障害児たちが将来に向って、社会なり社会生活から孤立していくのではなく、社会の一員としての役割を果たすため」のものとしてされた(昭和54年度、紀要第1集)。本校では、現在は「人格的自立」の観点に立った学校教育目標を据えているが、その転換の契機は1992～1994年度の研究主題「発達と障害に応じた教育をめざして—コミュニケーションに視点をあてて—」であったと言える。この中では、コミュニケーションが他者との対話に関わるものだけではなく、「自分の内面世界を見つめたときに出現する、もう一人の自分との対話」という意味での「自己内対話」もその概念に位置づけた。「自己内対話」とは、「自己客観視の力を高め、自己を改善・向上しよう、よりよく生きようとする『自分づくり』ができる力を育てることをねらう」とされ、ここで「自分づくり」の語が登場している(平成5年度、研究紀要第14集)。そして、発達年齢に即して「自己内対話の段階」が整理され、「自分づくりの段階表」が生み出された(平成6年度、研究紀要第15集)。

「自分づくり」への視点が見いだされた後、本校は「生活を楽しむ子」の育成をめざした研究に移った。その趣旨は、「今まで、社会的自立をめざして生活する力をつけていくことをめざしてきた」が、「まだ豊かな生活を楽しんでおくとはいえない。(略)このような実態から、さらに、内面的に楽しむ楽しみつつ内面から力をだそうとする子を育てていきたい」という本校のねがいがそこに込められている(平成7年度、研究集録)。研

究開始時の構想では、「われわれがめざす『社会的自立』とは、『生活する力』と『生活を楽しむ力』を合わせ持った姿」と、本校の創設以来の目標としてきた「社会的自立」の意味を、「生活を楽しむ中での社会的自立」と捉え直した。そして、「生活を楽しむ子」は「好きなものや自分が使う道具、さらには生き方などさまざまなものを自分で選んだり、段取りや筋道・周囲の状況を判断したりしながら、目標を持って主体的に自己活動し、できたことに達成感や成就感を持つ子」と考えたのであった（平成8年度、研究紀要第16集）。

今日の本校が掲げる「人格的自立」は、「生活の主体者として社会的、文化的、そして経済的な諸々の環境に対して身体的、情動的、知的な能力（＝学力）をもって統合的・主体（＝自己決定）的に働きかけ、相互の交換（＝コミュニケーション）の過程を軸に環境世界を拡大・深化させていくこと、言い換えれば自己の身体性の世界を解放することにほかならない」という意味で理解された（平成12年度、研究集録）。内面的な自己を解放しながら、支援を受けながらも自分の人生を自分のものとする子どもの姿を求めて、「社会的自立」から「人格的自立」が教育目標として位置づくことになったが、「人格的自立」を求めるにおいては、「自分づくり」を進めていくことが欠くことが出来ない重要な視点とされたのであった。

ところで、『生活を楽しむ子』をめざして」を研究主題にした頃の教師たちは、教師自身の変容についても言及している。『生活を楽しむ子』に育っていくことは、児童生徒が自ら『自分づくり』をしていくことであり、教師は共感しながら支援していくことが大切であるという考え方に立つようになった」（平成9年度、研究紀要第17集）、「教える技術以前の子どもたちと対峙する教師の姿勢が変わった」「教師＝子どもに与え、教えるもの」という図式から、共に生きよう、共に考えよう、生徒側に主導権を渡し、しっかりと見守っていこう、支援の手段を準備しながら待つ、という姿勢に変わっていききました」（「創立二十周年記念誌」、倉真理子の回想）などである。当時の元校長入江克己の言葉を借りれば、「児童生徒たちの変革のみが求められるのではなく、旧来の膠着した教師像からの脱却が要求される『共育』の過程」がこの頃に見られたと言えよう（平成13年度、研究紀要第18集）。そして、教師の「自分づくり」の機会にもなったとも言われている。こうして、「教授学校」ではなく「学習をつつみこんだ生活学校」として、「子どもを主体にした『生き生きとした』学校づくり」が、学校創設20周年前後に胎動したのである。「生活を楽しむ子」を掲げた研究主題の時期は長く設定されているが、渡部昭男によると1995～97年度の第一期と1998～2001年度の第二期には相違があり、後者は『生活を楽しむ子』をはぐくむ学校づくり」、すなわち「新しい学校を創るという明るい展望」を持っていたとされる（『「生活を楽しむ」授業づくり』）。

仮に学校の歩みを人間のライフステージに置き換えてみれば、青年期後期にあたる20歳前後に再体制化、つまり学校自身の「自分づくり」がなされたとも言えよう。そして、今日では「生活を楽しむ子」を育むためには、教師自身が「生活を楽しむ大人」として存在することまで言われるようになった（『七転び八起きの「自分づくり」』、むすびにかえて）。子どもだけではなく、教師自身そして学校自体が、「生活を楽しむ」「自分づくり」を体現化してきたのである。

表2 本校の研究主題の一覧

昭和53年	1978	表現化に視点をあてた教育課程の編成
昭和54年	1979	
昭和55年	1980	
昭和56年	1981	豊かな心を持ち たくましく行動する子
昭和57年	1982	
昭和58年	1983	
昭和59年	1984	発達と障害に応じた教育をめざして— 個に視点をあてた指導の実践—
昭和60年	1985	
昭和61年	1986	
昭和62年	1987	発達と障害に応じた教育をめざして— からだづくりを通して
昭和63年	1988	
平成元年	1989	
平成2年	1990	発達と障害に応じた教育をめざして— コミュニケーションに視点をあてて—
平成3年	1991	
平成4年	1992	
平成5年	1993	「生活を楽しむ子」をめざして—題材の 選定と支援の工夫—
平成6年	1994	
平成7年	1995	
平成8年	1996	「生活を楽しむ子」をめざして—個別の 指導計画をもとにした授業づくり—
平成9年	1997	
平成10年	1998	
平成11年	1999	「生活を楽しむ子」をめざして—障害・発 達・連携の視点から— ねらいを明らか に・実践を確かに・子どもを深く捉えよう
平成12年	2000	
平成13年	2001	
平成14年	2002	「自分づくり」を基盤とした教育の創造 ～段階別教育内容表の改訂を通して ～
平成15年	2003	
平成16年	2004	
平成17年	2005	個の育ちをつなぐ教育課程～個が生き る集団づくりに視点をあてて～
平成18年	2006	
平成19年	2007	
平成20年	2008	社会の中で主体的に生きる力を育む授 業づくり
平成21年	2009	
平成22年	2010	
平成23年	2011	社会の中で内発的にのびゆく子の育成 ～自分づくりを基盤として、キャリア発 達に視点をあてた教育内容～
平成24年	2012	
平成25年	2013	
平成26年	2014	いま伸びる力とあと伸びる力を育 てる～ライフステージを大切にした教育 内容と「自分づくり」～
平成27年	2015	
平成28年	2016	
平成29年	2017	

○ これからの学校づくり～生涯にわたり「生活を楽しむ」～

本校は、「今の生活を楽しむことが、将来も楽しむことにつながる」という考えに立ち、学校を「楽しい生活の場」にしようとしてきた。そして、今のライフステージにふさわしい学びや生活を保障することが「生活の質」を保障することであり、今の生活を充実させることは、そこで生まれる内面の豊かさが将来の豊かな生活へとつながるものと考えている。

ところで、2017年に告示された新たな学習指導要領において、特別支援学校の要領の前文では「生涯にわたる学習とのつながりを見通しながら」という文言が登場し、総則の中で「児童又は生徒が、学校教育を通じて身に付けた知識及び技能を活用し、もてる能力を最大限伸ばすことができるよう、生涯学習への意欲を高めるとともに、社会教育その他様々な学習機会に関する情報の提供に努めること。また、生涯を通じてスポーツや芸術文化活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう、地域のスポーツ団体、文化芸術団体及び障害者福祉団体等と連携し、多様なスポーツや文化芸術活動を体験することができるよう配慮すること」(下線部筆者)と記された。

2020年の東京オリンピック・パラリンピックを意識してか、「一億総活躍」を掲げた現政権が突如として、障害のある人々の「生涯学習」を政策課題として打ち出したのが、2016年12月のことであった。「特別支援教育の生涯学習化」とも称されているが、学校教育修了後の学習機会や文化・スポーツ活動に関して、学習指導要領で触れられる時代が来るとは、筆者自身正直想定していなかった。

本校創設時の教育目標であった「社会的自立」には、「楽しさ」「いきいきとした」「豊かさ」の意味も含まれていたが、その力点が生活ではなく「働く」「職業に就く」などにおかれ、かつては「今は楽しみを我慢して、将来楽しもう」と言うことがあったようである。今日の「人格的自立」の目標は、「社会的自立」に込められていたもう一方の意味を表す言葉として登場し、そして「今の生活を楽しむことが、将来も楽しむことにつながる」という考えに至っている。本校で積み上げてきた成果をもとに、新たな学習指導要領の先の箇所を読んだ場合、「生涯学習への意欲を高める」「スポーツや芸術文化活動に親しみ、豊かな生活を営むことができるよう」という文言には引っ掛かりをおぼえる。やはり、本校が見出した「今の生活を楽しむこと」が指導要領では弱く、「将来のため」という視点に立った生涯学習の要求に見える。

文部官僚であった寺脇研は、文部科学省が障害者の生涯学習を政策課題に位置づけたことを「“鎖国”を解いた」と表現した。そして、同じく前川喜平は知的障害の子どもの高等教育機関を用意していく必要から、「手始めに、特別支援学校の高等部に、知的障害のある子どものための専攻科を設けるという方法」もあることを述べている(前川・寺脇『これからの日本、これからの教育』ちくま新書)。知的障害特別支援学校としては、本校は国公立で唯一高等部専攻科を設置している。図らずも2017年は、専攻科設置12年にわたる実績と成果を一冊にまとめて世に問う年になった。そして、第47回「学校図書館賞(実践の部)」を、特別支援学校として初めて受賞した。学校教育に留まらない「生涯にわたる学習」が叫ばれる時代において、本校が蓄えてきた先駆的な取り組みの成果が、広く共有される絶好の機会が到来したと捉えて、「生涯にわたり『生活を楽しむ』人間」をめざした教育や学校づくりの実践が発信されていくことを期待したい。

本講演に際しては、本校の現旧教職員や卒業生・修了生のご家族に多大なるご協力を得た。この場をお借りして、記して感謝申し上げます。そして、母校である鳥取大学、学生時代の教育実習以来今日まで学ばせていただいている本校のさらなる発展を祈念する。

《参考文献》

- ・本校研究紀要 第1集(1979)～第33集(2017) 及び 研究集録
- ・鳥取大学教育学部附属小学校(1968)『創造の過程と学習展開』明治図書
- ・入江克己・渡部昭男監修・鳥取大学教育地域科学部附属養護学校(2002)『「生活を楽しむ」授業づくり—QOLの理念で取り組む養護学校の実践—』明治図書
- ・渡部昭男・寺川志奈子監修・鳥取大学附属養護学校(2005)『「自分づくり」を支援する学校—「生活を楽しむ子」をめざして—』明治図書
- ・渡部昭男(2009)『障がい青年の自分づくり—青年期教育と二重の移行支援—』日本標準
- ・三木裕和監修・鳥取大学附属特別支援学校(2017)『七転び八起きの「自分づくり」—知的障害青年期教育と高等部専攻科の挑戦—』今井出版
- ・藤原章(2014)『鳥取県特別支援教育のあゆみ—エポックの原動力を検証する—』鳥取出版企画室
- ・篠村昭二(1992)「二つの転回点—障害児教育」同『鳥取師範物語(下)』富士書店
- ・前川喜平・寺脇研(2017)『これからの日本、これからの教育』ちくま新書